ISSN 2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第119号 2024年11月15日

編集・発行『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人 冨岡勝・谷本宗生）
連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 冨岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム 現代私的院生事情（1）～ 修士課程編	猪股 大輝	2
1972年9月の学校法人大東文化学園寄附行為変更認可申請 ― 国立公文書館の公開資料から ―	谷本 宗生	11
大正時代の女子高等教育（68） 同志社女学校専門学部の設置～女子大学の準備	長本 裕子	13
進学案内書にみる戦前期東京の予備校（8） ：『最近東京遊学案 内』（大正3年）	吉野 剛弘	19
子どもたちと考える校則⑯ ―「ルールメイキング」を考える（2）―	八田 友和	21
刊行要項（2015年6月15日現在）		24
短評・文献紹介		25
会員消息		26

コラム

現代私的院生事情（1）～ 修士課程編

猪股（いのまた） 大輝（だいき）

（東洋大学）

本年3月をもって東京大学大学院教育学研究科の博士課程を修了し、縁あって東洋大学に職を得た。私の専門は教育史（生徒会活動を中心とした教科外活動の成立史）である。先生方の温かいご指導や、運が向いたことなどもあり、異例ながら標準修業年限（修士2年・博士3年）で博士論文提出まで進むことができた。ただし、年限内で修了した背景には、近年の大学院学生を取り巻く事情もある。コラムとして、2回にわけて私の大学院生活をレポートしていきたい。今回は修士課程までを扱う。

1. 入学まで

もともと大学院に行こうと最終的に決めたのは、学部3年の終わりごろであった覚えがある。進学するなら博士課程まで進もうと思っていたが、学部の指導教員（湯川次義先生）のご定年が近いということもあり、他大への院進を志すこととなった。研究分野は教育史であるが、大きく見ればシティズンシップ教育史を研究対象としていたこともあり、東京大学で教育思想・哲学を専門とされる小玉重夫先生ご所属の研究室を志望することとした。

他大への院進の流れというのは、管見の限り昔も今も変わらない。まずは、小玉先生に連絡をとり研究室訪問をさせていただいた。入試前の公平性を保つための接触禁止期間を除いて、院ゼミへの参加もお認め頂いた。その時のゼミの輪読文献はジャック・デリダの『マルクスの亡霊たち』であったが、早稲田のゼミとの内容や雰囲気の違いに随分驚いた記憶がある。院試対策として、過去問を取り寄せ、志望する研究室の先生方の論文・著作などを順番に読んで勉強を進めた。御縁あって9月の院試で合格をいただいた後も、小玉ゼミに毎回お邪魔し、修士ゼロ年生のような生活を続けた。

無事卒業論文を提出・学部を卒業して2019年4月に修士課程に進学した。以下では、進学した東大教育学研究科の基礎教育学コース（いわゆる「史哲」の流れをくむ、現在「教育学コース」）での修士課程学生のうちの様々な活動について、振り返っていきたい。

2. 授業と大学院生活

進学後はまず、研究室で推奨されていた複数教員のゼミを履修した。具体的には新たに指導教員となった小玉先生のゼミと、日本教育史の教員であった小国喜弘先生のゼミに継続的に参加した。

小玉ゼミではM1がゼミ委員として日程調整やゼミの司会を行う伝統があり、同期と役割分担しながら、ジャック・ランシエールの『無知な教師』や、ジュディス・バトラーらの『偶発性 ヘゲモニー 普遍性』の文献輪読を行った。ゼミには、指導生のほか、他ゼミや他研究室の学生も合わせ20名程度が毎回参加した。各章ごとに分担が割り当てられ、明示されていたわけではないが、指導生は内容要約と関連文献を自分なりに読み込んでテーマ設定をしたコメントを合わせ、10頁近くの比較的長めのレジュメを作成する習わしがあった。以降の小玉ゼミでも、上記のようにランシエールやバトラーといった政治思想系の文献輪読が続いた。論文に直接参照・引用するわけではないが、自身の問題意識の基盤となった。

また、コロナ禍に直面した M2（2020年度）～D2（2022年度）を除き、小玉ゼミでは1月に合宿を開催した。M1 であった2020年1月開催の合宿では、政治思想研究者の山本圭先生をお招きし、活発な議論や、先生を交えての充実した宴会が行われた。

特に宴会の部分から学生生活関連に話を広げると、小玉ゼミは、いわゆる「史哲」の伝統と比するとほとんど宴会をしないといっていいゼミだった。個別に学生間で小規模な宴会をすることはあっても、ゼミとしての宴会は学期に1度程度の開催に留まった。また、M2～D2までのコロナ禍の行動制限に直面した時期には、

ほとんどの宴会が自粛された。とはいえ、宴会がなくとも小玉ゼミの学生間の人間関係は比較的良好で、ゼミ外でも様々な研究の相談などは頻繁に行われた。ただ、全体として良くも悪くも個人主義的で、しばしば宴会ネタになるようなプライベートに踏み込むような交流はあまりなされなかった（例えば、指導生が結婚指輪をつけてきて初めて、交際関係を知るほどであった）。

その他の学生間交流の場は、授業時間外の院生室での関わりがある。東大では大学院学生の研究用に共有の部屋・ロッカー・本棚がいくつか用意されており、よく登校する学生は、居場所となるような特定の部屋・席を決め込んでいた。それぞれの部屋には異なる文化や色があり、院生室と所属ゼミが院生の2つの拠点であった。猪股がよく通った院生室は概ね小玉ゼミと小国ゼミの指導生からなる固定メンバーの多い部屋で、同室する期間の長かった方で既にポストに就かれた先輩方をあげると、松井健人さん（東洋大）・川上英明さん（山梨学院短大）・田邉尚樹さん（目白大）・渡邊真之さん（お茶の水女子大）・樋口大夢さん（東洋学園大）がいらっしゃった。全般に研究志向が強く、早期に博士論文を提出したり、就職したりする学生が多い部屋であった。日々学界に関する真面目な話からうわさ話まで、様々な話題で雑談した。次稿の博士課程編で書くことになろうが、こうした部屋の「色」を受け継いだ点も、博士論文を標準修業年限内で書き上げる要因の一つであったと言える。

小玉ゼミに加えて小国ゼミにもＭ１からＤ3まで参加することになった。入学した2019年度は1年を通じて1950年代がテーマとなった。成田龍一や大門正克、鳥羽耕史らの50年代論を下敷きにしながら、同時期に出版された様々な教育実践記録類―『新しい綴方教室』『基地の子』『おくれた子どもの生活指導』など―の講読が行われた。参加学生は、小玉ゼミと同様、指導生・他ゼミ生・他研究室学生など15名ほどであった。実践記録類の検討にあたっては、各回の担当者が出版背景や描かれた教育風景を読み解くレジュメを作成し、グループワークも交えた議論がなされた。学部時代には授業・研究とも制度史的な見方に

馴染んでいたため、このときの実践記録講読は知らないことばかりで大変刺激的であった。これらの経験も、研究に直接反映するというよりは、問題意識の基盤となり、また、現在授業づくりをする上で、大いに役立っている。

上記のゼミ履修のほか、所属研究室では、「総合演習」と呼ばれる年に5回、研究室の全教員、及びＭＩからD3までの学生が出席して行われる合同ゼミへの参加が必要であった。総合演習では、修士論文の構想発表や口頭試問、有志の博士課程学生の発表、新規着任・退職教員の記念講義などが行われた。修士課程学生にとっては、M2 の間に総合演習で計3回（構想発表・進捗報告・口頭試問）の発表が必要であり、これらに向けた準備が課題であった。ただ、こうした修士課程学生の発表の場において、以前までの「史哲」に見られたと聞く学生間の厳しい「指導」はなりを潜めていた。良く言えばアイディアを広げたり、学生の意欲を高めたりするような支援的な発言・雰囲気が基本であり、悪く言えば他人事的で表層的な議論に終始する場合が多かった。また、コロナ禍以降は、オンラインやハイブリッド形式での開催となり、総合演習後に行われていた研究室全体での宴会（「大コンパ」）も2022年まで自粛され、研究室の共同性を確認する場としての機能は失われていた。

コースの授業履修以外にも、大学院では複数の授業を履修した。第一に修士課程の修了要件として、他研究室（コース）のゼミ、ないし授業の履修が必須であった。これらを通じ、コース間の学生交流も意図にあったものと思われる。私は、単位を満たすため、佐藤修司先生が内外事項区分論等を扱われた「教育法制の理論と展開」、岡野八代先生がケアリング論等を扱われた「ケアの倫理と社会構想」の集中講義を履修した。東大教育学研究科では、このように他大学から先生をお招きした講義を各コースが主催・開催していた（私が所属した基礎教育学コースでは、お招きする先生について学生から希望を出すことができた）。これらは単年開催となることが多く、興味関心に近い両先生の講義を履修できたことは僥倖であった。

第二に、教職課程の単位となる授業を複数履修した。学部生時には、いわゆるゼロ免課程の教育学科に在籍していたこともあり、免許科目はそれなりに揃えていたものの、体系的な履修を怠っていた。しかし、学部3年の末ごろに授業を履修していた坂倉裕治先生に院進の相談をしたところ、教育学で院進するならぜひとも教員免許を取っておくように、とご助言いただき、学部4年次より本格的に履修を始めた。当然、1年で単位を取りきることは不可能で、院進後も相当程度の単位取得を行った。また、M1で介護等体験、M2 で教育実習に参加した。これらは、研究時間の点でそれなりの重荷となったが学ぶ点も多かった。特に東大では、いわゆる「教科に関する科目」が、文学部設置の専門科目で代替する設定となっていた。これ幸いと履修した加藤陽子先生の近現代史の講義などは、教育史外の日本史学の議論に十分触れてこなかった私にとって大変刺激的な授業であった。

3. アルバイト

大学院在籍時にも、学部生と同様、様々にアルバイトに時間を使う学生が多かった。特に修士課程には目立った経済支援がないことから、アルバイトに励む学生が多い。内容は様々で、TA など大学に関係した仕事から、学部生と同様に飲食店などでアルバイトする学生などまちまちであった。私もいくつかのアルバイトに関わった。

第一に、特技の写真撮影技術を活かし、様々な学校現場でのカメラマン業を請け負った。パートタイムのカメラマンは学部生時代から続けていたもので、一本で生活するには心もとないが、一般的な他のアルバイトと比べると実入りが良かった。カメラマンという、いわば傍観者・第三者的立場から、幼保小中高に至るまで多様な学校・施設の様子を見学できたことは後の授業の場などで様々に生かされることになった。

第二に、せっかく教育学研究の道に進むなら学校に関わる経験をしておこうと、週に 1 度、公立小学校の支援員をすることにした。支援員としてはいわゆる「学

級崩壊」クラスや、特別支援学級の補助などに入った。まとまった時間を取られ、心身ともに厳しいアルバイトであったが、特にコロナ禍における学校現場や子どもの困難を踏まえながら、実存的な問題として教育学理論に向かうことができるようになった点は、その後の教育・研究の欠くことの出来ない経験となった。

第三に、早稲田大学の湯川次義先生のもとで、研究補助者として先生の『戦後教育改革と女性の大学教育の成立』（2022 年、早稲田大学出版部）につながる様々な資料収集・翻訳・校閲等に関わらせていただいた。このことを通じ、お金を頂戴しながら、資料の集め方をトライアンドエラーで覚えた。また、集めた資料が先生なりの鮮やかな手さばきでまとめられ、論文化されていく過程を追体験することができた。更に、湯川先生には、先生のご退職（2021年度）まで、大学院ゼミの参加をお認め頂いた。教育史研究のイロハはすべてこのアルバイト、及びゼミへの参加でご指導いただき、勉強したものである。

4. 院生間競争・研究・修論

ここまでの内容は、管見の限り、概ね以前までの大学院生活と概ね変わらない。しかし、大きく変わった点もある。それは、博士課程学生の経済支援制度の充実と、それに伴う院生間競争・業績追求風潮の低学年化である。

近年の博士課程学生への経済支援制度は、一昔前と隔世の感がある。例えば、日本学術振興会の「特別研究員 DC」制度の定員がそれなりに確保され、採択されれば、毎月 20 万円の生活費と科研費を保証される。また、東大には「国際卓越大学院教育プログラム」（教育学研究科では 2019 年から）や、科学技術振興機構(JST)の次世代研究者挑戦的研究プログラムの一環である「SPRING GX」制度（2021 年から）が用意された。それぞれ学内選考を経て採択されれば、学振 DC と比するとやや劣るが、毎月の生活費分の給与などの経済的支援を受けることができる。こうした学振 DC、及び学生目線からは「DC 不採択学生の敗者復活戦」の諸制度により、現在、教育学研究科では概ね半数程度の博士課程学生が奨学金や学費減免以外で、数百万円規模の経済支援

を受けることができる状況となっている。

これらの制度整備は当然望ましいが、すべて申請書による選考＝競争を伴う点が影を落とす。具体的に、D1 から支援が開始される制度の選考は M2 の春から開始される。勢い、M2 の春段階までに選考のための申請書を書くという行為が至上目的化する。そうすると、例えば、自身の研究遂行力のエビデンスとなるような、申請書に書ける業績があると有利なように見えてくる。そして、学生は卒論時点や遅くとも M1 末にはテーマ設定と絞り込みを急ぐ。結果として、大きなテーマよりも論文になりそうなテーマが選択され、研究が小さくまとまっていく。

また、メンタルヘルスの問題もある。学振 DC の場合は審査員が匿名化されており、争うのも全国の同学年の教育学全体の学生である。落ちたら運が向かなかったと、ある程度納得できる。しかし、「DC 敗者復活戦」の学内選考の相手は、同研究科・同コース（研究室）の同期となる。早い段階から、博士課程の生活費をかけた、アカデミックポスト獲得競争の前哨戦の様相を呈する戦いに投げ込まれる。特に「卓越」制度の選考は所属コース教員を中心に行われる（ように見える）。「卓越」の応募は DC 申請書を使って行われる。また、応募期間が DC 提出後に設定され、DC より先に結果がでるので、DC 申請者（≒東大では博士課程進学希望者）はほぼ全員が申請する。結果として、同制度の運用を通じて、コース教員からみた、M2 段階の学生ごとの「研究能力」や「将来性」に対する評価・序列が顕在化される仕組みになっている。このような競争構造が、ますます早く論文を出さねば、との焦りを加速させる。「習うより慣れよ」の言葉通り、論文執筆スキルを早くから身につけられるメリットはあるが、腰を落ち着けて勉強・研究を重ねた論文が出にくくなっていく。

私の修士課程時は、それなりの定員規模が割り当てられることになる JST の SPRING プログラム開始前であり、支援プログラムは DC と「卓越」のみであった。選考に向けてコース内では M1 末頃から過去に DC に通過した諸先輩の申請書が共有され、選考＝競争が始まっていく。特に、M1 の3月末締切の『研究室

紀要』（学内査読付き）には、「掲載決定済」として DC 申請書に書き込むべく多くの修士学生が投稿する。私もご多分に漏れず『研究室紀要』に卒論をもとにした初発論文を投稿した。続いて GW 開けには DC 申請書の提出締切がやってくる。折悪く、時は2020年、コロナ禍における最も強力なロックダウンの時期であり、登校はおろか、ろくに外出もできず、指導も受けず、右も左もわからないまま申請書を書いた。更に卒論からもう一つ論文化出来そうなものがあったので、これも見様見真似で5月末に『関東教育学会紀要』に投稿した。

結果、論文は2本とも載り、DC、及び DC 申請書を使った「卓越」は落ちた。今読み返せば論文は史料がそれなりで、小粒ながらなんとか形になっている。申請書は、研究を広い文脈に位置づける書き方ができておらずひどい出来である。全体的に小さくまとまってしまい、展望がない。しかし、こうした評価は後づけである。当時は、自分がどうなっていくかもわからないなか、将来性を明証する選考＝競争に敗れたものと思い、ひどく落ち込んだ。ただ、論文が通ったので、史料をきちんと集めて書けば評価されることを得心できた点は幸運であった。うまく研究上の問いが立たなくても、ひとまず史料を集めていれば研究が進んでいき、そもそも史料集め自体が愉快な点が教育史研究の救われるところである。

卒論では戦後改革期の「生徒会」成立史を扱ったので、修論では改革の背景をなすアメリカ進歩主義教育運動についても視野を広げることにした。幸い、アメリカは一定期間立つと電子化された書籍をオープンアクセスとする仕組みが確立している。コロナ禍で渡米出来ない中だったが、夏頃から登校できるようになった院生室の片隅で、研究対象のほぼすべての書籍や雑誌、簡単な書簡まで見ることが出来た。これらをすべて詰め込んで「資料集」のような修論を書いた。まとまりなく200頁にまで紙幅が膨れ上がったが、後で役に立った。

明けて2021年1月に修論提出、口頭試問が終わり、2月には博士進学の院試面接があった。無事合格をいただき、博士課程に進めることになった。また、修論の一部を、湯川先生の研究室の紀要（『日本教育史論集』）に投稿した。続けて、ちょうど修士課程修了とともに教員免許を得たところで、先輩（樋口大夢さん）

から東大附属の非常勤の口を紹介いただいた。また、本レター同人の田中智子さん（当時早稲田大学大学史資料センター）のもとで、占領軍史料を収集・翻訳する研究補助者の職をいただいた。コロナ禍でカメラマン等のアルバイトの口が激減していたので、これ幸いとお受けした。博士課程進学直後から、D2 以降の支援を選考する学振「DC2」の競争が始まる。その準備をしながら、修士課程を終えた。

＊このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています

1972年9月の学校法人大東文化学園寄附行為変更認可申請

― 国立公文書館の公開資料から ―

谷本（たにもと） 宗生（むねお）（大東文化大学）

1972（昭和47）年9月、学校法人大東文化学園の理事長金子昇は、文部大臣稲葉修にあて、「学校法人大東文化学園寄附行為変更認可申請書」（大東文化法総務第60号）を提出している。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（一）寄附行為変更の条項

この法人は従来、大学・高等学校・中学校・小学校・幼稚園・各種学校を維持経営してきたが、今回大学に法学部を設置し、文学部・経済学部・外国語学部・法学部の四学部の大学とすることになったので、これにともない寄附行為の一部を、次のとおり変更する。

一、第四条（設置する学校）第一号を大東文化大学・大学院・文学部・経済学部・外国語学部・法学部とする。

（二）寄附行為変更の事由

本法人は従来、大東文化大学・大学院・文学部・経済学部・外国語学部・大東文化大学第一高等学校・大東医学技術専門学校を設置し、また加うるに本年度より、大東文化大学附属盈進高等学校・大東文化大学附属盈進中学校・大東文化大学附属盈進小学校・大東文化大学附属盈進幼稚園・大東文化大学附属青桐幼稚園を設置し、総合学園として創立49年の歴史と経験をもとにいっそうの教育の充実をはかってまいりました。今回さらに学園の施設・設備の充実、並びに職員組織等のいっそうの強化を見るに至りましたので、新たに大東文化大学に法学部を設置することになりましたので、これにともない寄附行為の一部変更申請をおこなうものであります。

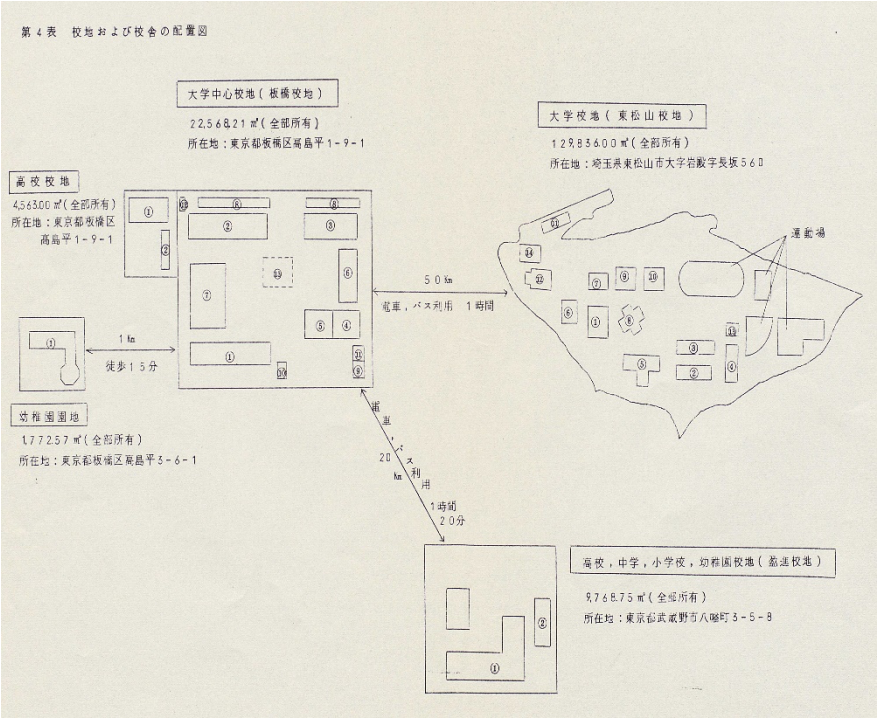
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翌年2月、法学部設置にともなう寄附行為変更について、以下のような留意事項が付されて認可されたのであった。

【留意事項】

（一）既設学部の定員超過の状態を改善するよう努めること。

（二）借入金を財源とする計画は差し控え、負債を計画どおり確実に返済し、法人財政の健全化をはかること。



実際、1972年の段階で、文学部の入学定員440人・総定員1760人・現員2807人、経済学部の入学定員350人・総定員1400人・現員5318人、外国学部の入学定員160人・総定員640人・現員493人のとおりであった。

大正時代の女子高等教育（68）

同志社女学校専門学部の設置～女子大学の準備

長本（ながもと） 裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

明治23年1月、新島襄が亡くなり、同年6月、東京第一基督教会（後、霊南坂協会）の小崎（こざき）弘道が第2代同志社社長に就任した。当時は同志社社長が同志社英学校及び同志社女学校の校長を兼任していた。しかし、新島が亡くなると、財産問題、教育主義問題をめぐって、次第に同志社とアメリカン・ボードとの対立が強まる。アメリカン・ボードは同志社を伝道者養成のための神学教育機関と考えていた。新島らの個人名義で所有されている同志社の財産もアメリカン・ボードの寄付によって購入されたので、実質的にはミッションのものであり、教育事業はミッションの事業と思っていた。しかし、同志社社員や日本人教師たちは、寄付された以上は同志社の所有であると主張し、精神的にも経済的にもミッションから独立し、日本の教会の自由自治を確立しようとした。やがて29年4月、同志社はボードの援助を謝絶し、全宣教師が一時同志社を辞任するという事態になる。

松浦政泰の改革―高等教育のはじまり

そうした不穏な雰囲気の中、23年9月、松浦政泰が女学校に就任し、翌年4月、教頭に推され、立て直しを図った。教頭は事実上の校長職に相当した。松浦は、女学校再建維持するために募金活動に奔走し、専門科の整備に取り組んだ。20年8月の「同志社女学校規則」によれば、本科（4年制）の上に高等科（3年制）を設置して、高等教育を始めたが、まだ卒業生を出していなかった。そこで、25年6月、規則改革を行った。

高等科を2年制の「専門科」と改めた。同志社女学校専門科の目標は、「或は教育家とし女記者とし、或は伝道師とし慈善事業家として、社会の表面に立ち、婦女子の地位を高むるが為に、一臂の力を尽さんとする者」を造出するとした。そして次の3科を置いた。

師範科：主として高等の科学数学を授ける。

文学科：東西の文学および歴史を教える。

神学科：聖書および神学を学ばせる。

最初の入学生は師範科8名、文学科8名、神学科2名、合計18名であった。27年6月に第1回卒業生、師範科2名、文学科2名、合計4名を出した。神学科の卒業生は1名も記録になく、数年後に廃止される。

専門科は、女学校図書館を充実させ、同志社図書館も借覧可能にして、自主研究を奨励した。卒業論文も課した。第2回卒業式当日の午前中に、卒業論文朗読会が開催された。6名の卒業生たちは、1名米国留学、2名公立女学校に就職、2名私立女学校に就職、1名は帰郷した。

同志社女子大学設立準備はじまる

その後、何度か規則改正が行われ、学科名も変更されたが、明治41年7月、原田助（たすく）校長、中瀬古六郎教頭時代に、専門学部（2年制、明治34年に設置）を拡張し、私立女子大学とするための第2回基本金募集を展開した。さらに、44年8月～大正3年9月まで、第3回の基本金募集を行い、1万2,211円に達した。同じころ、ニューヨーク市のD.W.ジェームズ夫人から、10万ドル（21万余円相当）、さらに大正2年、6,000ドルが追加寄付された。これにより大正3年に専門学部専用のジェームズ館、翌4年に家政館を新築した。明治45（大正元）年には米国太平洋婦人伝道局の寄付4万1,190円で静和館を落成した。

このように設備は整いつつあったので、明治44年11月、同志社理事会は、同志社大学の設立および女学校を拡張して、女子大学とする決議を行った。同志社女子大学設立準備委員長を松本亦太郎（校友・京都帝国大学教授）に委嘱し、原田助同志社社長は、中瀬古六郎、松浦政泰など16名に委員を依頼した。松本委員長は、45年1月の同志社教職員新年会において、同志社女学校に大学部を開設する理由を宣言した。その要旨は、

1、 米国の有志家殊に婦人篤志家が与えてくれている多大な義侠的助力に応えるために、女子の高等教育機関を設ける義務がある。

2、　女子に高等教育を施す機関は、東京に日本女子大学校があるだけである。官立の女子高等師範学校は教員養成を目的としているため、リベラル・カルチューアが不足している。女子に対し不公平である。国家が女子の高等教育機関を設けないならば、民間の努力により設けねばならない。

3、　男子のための公私の高等教育機関が設立されて、男女の間に懸隔を生じている。この悪現象を除くためにも女子に高等なる程度の教育を授けておかねばならない。

（『同志社女子大学125年』参考）

というものであった。

「専門学校令」による専門学部設置

45年1月、文部省に「専門学校令」による専門学部設置を申請した。同志社大学設立認可と同じく同年2月に認可された。名称は「同志社女学校専門学部」とした。名称に「女子大学部」としなかった理由について、松本委員長は次のように述べている。

学校の名称は女子大学部と称する事は二重の困難である。第一は文部省では大学部と称する事に対して省内に異議が多く、強て大学部で出願すれば専門学校に指定する事も許可されない事になるかも知れない。第二は学校の規模内容がまだ大学という名称を掲げる程度に達していない。このような点から委員会においては当分の間同志社女子専門学部という名称を用いる事に決定し、文部省に出願したのである。

（畑中理恵『大正期女子高等教育史の研究』―京阪神を中心にして―　参考）

45年4月、同志社女学校専門学部の始業式を行った。専門学部は、本科として家政科（3年）、英文科（3年）を設けた。入学資格は高等女学校5年の課程卒業者とする。ほかに高等女学校4年課程卒業程度とする選科を置いた。生徒定

員合わせて180名とする。学科目は単に家政、英文を専修させるのではなく、随意科も多く設けて、リベラルな教科を配慮している。松本は、

機械のごとく有用なものを注入するのではなく、倫理、心理、教育、児童研究、哲学、美術史、法制、文学、歴史などの学問を通して人間についての考えを養うことによって、知能を開発し品性を向上させ、「立派なる人間大国民の母たらしめんとし大国民の妻たらしめ大国民の娘たらしめん」とした。

（『同志社女学大学125年』参考）

というリベラル・アーツによる人格教育を根底に置きながら、世間が要求する「賢母良妻」を掲げることも忘れなかった。

学科課程

学科課程は下記のようである。数字は1週間における時間数を表す。

家政科

1学年：修身1 倫理学2 心理学2 国語漢文4 英語英文学4 応用理化学2 美術史2 経済学2 料理6 礼式作法2 体操2 計29

2学年：修身1 倫理学2 教育学・教授法・児童研究2 国語漢文3 英語英文学4 応用理化学2 生理衛生学2 料理6 園芸2 体操2 計26

3学年：修身1 教育学・教授法・児童研究2 国語漢文3 英語英文学4 応用理化学2 生理衛生学2 哲学概論2 憲法及法令2 料理6 園芸2 体操2 計28

英文科

1学年：修身1 倫理学2 心理学2 国語漢文5 英語英文学12 美術史2 歴史2 体操2 計28

2学年：修身1 倫理学2 教育学・教授法・児童研究2 国語漢文5 英語英文学12 歴史1 文学史2 体操2 計27

3学年：修身1 教育学・教授法・児童研究2 国語漢文5 英語英文学12 哲学概論2 憲法及法令2 体操2 計26

随意科目は、家政科の1学年に歴史2、2学年に歴史1、文学史2。英文科の全学年に料理3。家政科・英文科全学年共通として仏蘭西語2、音楽2、絵画3、裁縫4。

（『同志社百年史』通史編一　参考）

教員は、同志社社長・原田助校長、臨時教頭事務・松本亦太郎、中瀬古六郎（理化学、英語）、松田道（英語、英文学）、エレン・E・ケーリ（英語、英文学）、メアリー・F・デントン（英語・英文学）、グレース・W・ラーネッド（英語、英文学）、アンナ・L・ヒル（音楽）、ルイーズ・H・デフォレスト（音楽）、中目滝子（園芸）、原田助（倫理）、和田琳熊（教育学）、松本亦太郎（心理学）、桑木厳翼（倫理、哲学）、上田敏（文学史）、原勝郎（歴史）、藤井乙男（国語）、鈴木虎雄（漢文学）、中井宗太郎（美術史）、佐伯理一郎（衛生、看護）他。同志社大学と京都帝国大学の人脈の支援を得た教員配置であった。

専門学部の発展

最初の入学生は家政科14名、英文科22名、計36名、内、17名が選科生であった。大正元年11月、規則改正を申請し、予科（1年）、国文科（3年）、各研究科（1年ないし2年）を設置した。予科は4年制の高等女学校卒業生に対して、本科への準備期間とする。国文科は国文を専攻しようとする者が多いことと、“京都は古今文化の遺跡が多く、山水美あり国文学学修の土地として適当の場所である”ことを挙げている。研究科は、本科およびこれと同等の学校の卒業生に「更ニ本校専門部所設ノ学科ヲ専攻セントスル者ノ為メニ設ク」としている。しかし、「同志社大正二年度報告」には本科選科生を合わせて54名、すべて英文科および家政科の学生で、国文科はまだ開始するに至らないと記されている。

さらに、改正を重ねて、昭和3年、専門学部は、英文科予科（1年）、英文科本科（3年）、家政科（3年）に整理された。選科、研究科は廃止。文部省「新高等学校令」の文科と理科にほぼ相当する内容であった。

生徒数は漸増し、第一次世界大戦後の大正9年度は同志社女学校全体が389名から680名に増加し、専門学部も入学生が119名に急増した。大正12年の専門学部在学生は458名に達した。12年4月、500名に定員増を願い出て、同年5月認可された。さらに大正14年度は750名に増員することが認可された。昭和2年度は入学志願者591名、入学者265名、専門学部史上最高の721名に至った。専門学部の学生急増の背景には、「本校英文科卒業生は同志社大学への入学の資格あり」と文部省の認可があったことが挙げられる。その他の理由として、関西地方に女子英語研究の最高機関が少ないこと、設備や教員の充実、同窓生が一千名を超えて、その子女や親族、知人の子女を母校へ送ってくること、卒業生が各府県立高等女学校や他の公立学校へ英語その他の教員として奉職し、その教え子を母校へ紹介することなどの理由があった。

参考文献

『同志社女子大学125年』
『同志社百年史』通史編一
畑中理恵『『大正期女子高等教育史の研究』―京阪神を中心にして―
宮澤正典『同志社女学校史の研究』
土肥昭夫「1890年代の同志社：岐路に立つキリスト教主義学校の問題（1）」『基督教研究』40巻1号
http://doi.org/14988/pa.2017.0000004022

進学案内書にみる戦前期東京の予備校（8）：

『最近東京遊学案内』（大正３年）

吉野（よしの） 剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

今号では、東華堂より刊行された受験学会『最近東京遊学案内』の 1914（大正３）年のものを取りあげる。同書は1911（明治44）年にも刊行されたが、内容が 1908（明治 41）年のものと同一である。そこで今号では 1914（大正3）年のものを検討するが、1908（明治 41）年のものと同一の場合はそのように示し、変更箇所があったものは変更箇所を示すことで、情報の変化も合わせてみていくことにする。

「第八章 雑種諸学校」に掲載された情報は、すべて 1908（明治 41）年のものと完全に同一である。よって、取りあげるべきは「第四章 外国語学校」に掲載された機関のみとなる。同書で示されている情報は、1907（明治 40）年、1908（明治 41）年のものと同じく「位置」「目的」「学科及修業年限」「学費」であるが、記載内容に変更があった項目は、項目名に下線を付す。1914（大正 3）年のものには、一部の機関に電話番号が掲載されるようになった。「位置」のところに示されるのだが、電話番号のみが変更箇所という機関は、名称とともに電話番号を付記する。

正則英語学校（電本二〇九六）

【1908（明治 41）年のものに同じ】

青年会英語学校（電本一五六）

【1908（明治 41）年のものに同じ】

国民英学会

【1908（明治 41）年のものに同じ】

英学専修学館

位置　東京市神田区仲猿楽町十七番地

目的　本館ハ官、公、私立諸学校ニ入学準備又ハ日課補習ヲ為ス者又ハ其他実業ノ余暇ヲ以テ修学セントスル為ニ教授スル所トス

学科及修業年間　英語、数学、

修業年間ハ約一ヶ年

学費　尋常科金五拾銭、中等科七拾銭、高等科金壱円五拾銭

普通科、受験科、高等科、数理化受験科、随意科ハ一円

英文学科、会話専修科ハ金二円二十銭

中央英語学校

【1907（明治 40）年のものに同じ】

　すでに述べたように『最近東京遊学案内』は書名を変えて刊行が続いていくが、筆者が現在集めているものは 1914（大正 3）年のものが最新である。次号からは他の進学案内書を取りあげて、明治末年頃の予備校に関する情報を見ていくことにする。

子どもたちと考える校則⑯
ー「ルールメイキング」を考える（2）ー

八田 友和（はった ともかず）（クラーク記念国際高等学校）

1．はじめに

前号では、「みんなのルールメイキング」について、プロジェクトの概要や筆者が大切だと考えるポイントを整理してきた。本号では、『ルールメイキング教員ガイド』（以下、『教員ガイド』と表記する）をもとに、ルールメイキングの具体的な流れについて紹介を行う。『教員ガイド』は、「校則の見直しを行いたいが、周囲の理解を得られない」「何からはじめたらよいかわからない」「見直しの進め方に不安がある」など、様々な疑問や不安を解決・軽減してくれる心強い味方である。

2.『教員ガイド』の概要

『教員ガイド』は、①事前準備編、②実践編、③先生向けQ&A編の3つの章に分かれている。加えて、「みんなのルールメイキング公式Youtube」に公開されている動画教材（11本）も紹介されている。動画教材は「入門編」「実践編」「番外編」の3セクションに分かれており、どのセクションから視聴しても、ルールメインキングのヒントが得られるようになっている。動画教材はいずれも5分前後で作成されており、集中を持続させながら一度に視聴できる。

次に、「（1）事前準備」「（2）はじめよう！」「（3）ひろげよう！」「（4）新しいルールを提案しよう！」「（5）プロジェクト全体の振り返り」の5つに大別して、『教員ガイド』を概括する。プロジェクトおよび『教員ガイド』の詳細は、認定特定非営利活動法人カタリバ『教員ガイド』を参照いただきたい。

（1）　ルールメイキングの事前準備

① 入門編動画をみて対話し、ルールメイキングへの意欲を高める

② 実施目的を整理し、取り組む意義を周知する

③ 年間計画を立てる

④　ルールメイキングの実施目的を教員に伝える

⑤　校則検討のメンバーを募集する

⑥　チームビルディング：生徒・教員の関係づくり

⑦　１年間の見通しをもつ

（2）　ルールメイキングをはじめよう！

⑧ ルールについての基本認識を形成する

⑨ 対話についての基本認識を形成する

⑩ 広く検討すべきルールを見つける

⑪ 見直したいルールを決める

（3）ルールメイキングをひろげよう！

⑫ 調査計画を立てる

⑬ 調査を実施してデータをまとめる

（4）新しいルールを提案しよう！

⑭ 新ルール（解決策）をつくる

⑮ 新ルール（解決策）を提案する

⑯ 新ルールの運用に向けて準備をする

（5）プロジェクト全体の振り返りをする

また、各項目の末尾に実践事例が紹介されており、ルールメイキングの取り組みを具体的にイメージしやすくしている。

3.『教員ガイド』のルールメイキングQ&A

『教員ガイド』には、「ルールメイキングQ&A・先生のお悩み相談室」という項目が設けられている。「まずはひとりで」「身近な誰かと一緒に」「学校全体で」「外部のコーディネーターや専門家を交えて」「保護者・地域の方々へのアプローチ」など段階を追いながら“できること”についてまとめられている。また、生徒とともにおこなうルールメイキングの取り組みはもちろん、教職員が話し合う際の不安や悩みを軽減する方法もまとめられている。

加えて、「みんなのルールメイキング」プロジェクトでは、全国のルールメイキングに取り組む学校・教員コミュニティの運営や情報発信を行っており、そこに参加することでルールメイキングの実践や情報を得ることができる。

4. 雑感

本稿では、『教員ガイド』の概要について整理・提示してきた。筆者も本連載をはじめた際、「子どもたちと勤務校の校則を見直したい・考えてみたい」と意気込んでいた。しかし、分掌の多忙化や転勤など、様々な要因が重なり、思うように進んでいない。そんな折「みんなのルールメイキング」の取り組みや『教員ガイド』の存在を知った。今までは、一人で暗闇のなかをもがいているような感覚であったが、一縷の希望を見いだすことができた。『教員ガイド』の気になるページから読み進めるだけでも、心の中のモヤモヤが解消されるきっかけになると感じている。

5. さいごに

この連載では末尾にQRコードを添付しています。拙稿に対するご意見・ご感想などございましたら、ぜひQRコードからお寄せいただけますと幸いです。今後の研究や執筆活動の参考にさせていただきます。なお、本稿における内容や意見は、筆者個人に属し、筆者が所属するいかなる組織・団体の公式見解を示すものではありません。

ご意見・ご感想などは、上記のQRコードからお寄せください。

参考文献

・古田雄一・古瀬正也（編）『ルールメイキング宣言』認定特定非営利活動法人カタリバ ルールメイカー育成プロジェクト，2022年

・古市雄一・認定NPO法人カタリバ『校則が変わる、生徒が変わる、学校が変わる』学事出版，2022年

・認定特定非営利活動法人カタリバ『ルールメイキング教員ガイド』

・みんなのルールメイキング（2024年10月15日）
https://rulemaking.jp/

短評・文献紹介

本年 5 月に、一般企業で働きながら大阪市立自然史博物館の外来研究員をつとめている熊澤辰徳さん（36 歳）が、自身のフィールドワークであるハエ研究をまとめた『ハエハンドブック』（文一総合出版）を刊行されました。図鑑の完成まで、社会人として働きながら休日の時間を研究にあて 6 年もかけて、日本初のハエ目の図鑑を公刊したそうですよ。熊澤さんの飽くなき探究心は現状に満足せず、これから「より専門的な知識を盛り込んだ本を出して、関心を持つ人を増やしたい・・」といいます。好奇心から研究へと、なんとも魅力あふれる話題だと、正直感じました。（谷本）

今は学校での一人一台端末を含め、インターネットへの接続が当たり前のようになっているが、大地震などが起きれば携帯電話の回線や電気が止まってしまってしまう可能性は高い。そんな災害時にもラジオは、乾電池があれば長時間受信できるので、むしろローテクだからこそ、ラジオは重要だと思う。そんなことを時々考えていたので、通勤途中に購入した雑誌『ビッグイシュー』第 492 号(2024 年 12 月 1 日付）をめくっていたときに、「「持ち運べるラジオ局」被災後すぐにでも開局！ スマホと1万円の材料でつくるバックパックラジオ」という記事に惹きつけられた。

この記事では、バックパックに放送機材一式が入る「バックパックラジオ」を考案者である瀬戸義章さんの取り組みが紹介されている。瀬戸さんは、2011年の東日本大震災の被災地でボランティアをしていたときに、宮城県山元町が開局していた臨時災害 FM 放送局の存在を知ったという。町の防災無線が地震の揺れで使えなくなり、さらに広報車が津波で流されて町民への既存の情報伝達手段が失われたなかで、役所の階段の裏側のようなところに開設された臨時災害 FM 放送局を通じて、被災状況や生活・医療情報などが、「地元の運動会の様子」など日常を感じさせる内容とともに FM 電波で届けられ続けていたという。コミュニティラジオに興味をもった瀬戸さんは、「持ち運べるラジオ局」のアイデアを提唱し、2016年にはスマホと材料費1万円以内でそろえたコンパクトな機材で放送局が開設できる「バックパックラジオ」を開発した。日本では放送法の制約があるため、インドネシアで試験放送やワークショップを開いたそうだ。

40年ほど前、100メートルほどしか電波の届かないミニ FM ラジオ局（電波が弱いため、開設免許不要）が少し流行っていたが、私も大学寮の居室に「FM らいちょう」という名称のミニラジオ局をつくって仲間といっしょに楽しんでいたことがある。瀬戸さんの著書『雑草ラジオ 狭くて自由なメディアで地域を変える、アマチュアたちの物語』（英治出版、2013年）を読んでみたい。何らかの形で再び始められたら面白そうだ。（冨岡）

会員消息

先日、八王子で坂本辰朗先生や坂本先生の指導生であった岩木勇作さんと、たのしく歓談しました。ちなみに岩木さんは、2020年、取得した学位論文をもとに東信堂から著書『近代日本学校教育の師弟関係の変容と再構築』を公刊しています。日本教育史の同人諸氏らも、きっとご覧になっていることでしょう。その彼の研究のキッカケとなったというのが、2010年旧制高等学校記念館（松本市）で開催された夏期教育セミナーでの個人発表であった・・といいます。

ただこの時のことにつき、彼の弁では、「この発表は非常に残念な出来になってしまい、参加された方々には大変に不快な思いをさせてしまった。私は慚愧の思いから発表後は俯いて顔を上げられないほどであった。・・申し訳ないことをしたと未だに反省している。謝罪と共にこの発表が発端となって本書が出来たことを感謝申し上げる」（同上書・あとがき）と、自戒しながら吐露しています。岩木さん自身の真摯な継続した研究姿勢が、その後相応な実を結んだものと感じますね。岩木さんから実はこの話をうかがうたび、この時の夏期教育セミナーの世話人を冨岡勝さんとともにつとめた私谷本は、彼の研究活動に大いにプラスになったことがとてもうれしい思いです。私はすでに松本市のセミナー世話人を退任しましたが、冨岡さんを始め現在の世話人諸氏が大いなる志をもって、岩木さんのような若き研究者らに対し、研究発表の機会を提供していくことを願っています。（谷本）

私事ですが、両立支援コーディネーター基礎研修を修了しました。患者・家族が治療と仕事の両立を図るなかで、病院や企業の間にたち、仲介や調整を担うのが“両立支援コーディネーター”です。通信制高校で働くなかで多様な背景をもつ子どもたちと接してきました。進学や就職後に両立支援が必要なケースも散見されました。高校卒業はもちろん次のステップでも充実した生活が送れるように両立支援の視点を生徒指導や進路指導などに活かしていきたいと思います。（八田）

通勤時間の読書は、もっぱら持ちやすい新書版を選びます。最近読んだのは原口厚氏の『日本人と言葉－貧困化の背景を読む―』（早稲田新書、2024年）です。筆者の原口氏は早稲田大学商学部の元教員でドイツ語学・ドイツ語を教えていました。大学というところはどういうところなのか。筆者の主張する大学教育の課題について、とても納得しました。（山本剛）

ここ1ヶ月ほど、松本深志高校での探究授業への協力、「スクールボイス」プロジェクトの研究会への参加、近畿大学の歴史に関する退職教員への聞き取り調査、「21世紀に吉田寮を活かす元寮生の会」総会の準備・実施、関西教育学会大会（京都大学）、近畿大学同窓教員親睦会、京都シティフィル合唱団での普段の練習に加えてオペラ「カルメン」の合唱練習への参加、など楽しく過ごしていましたが、「使える時間」と「仕事や用事の時間」のバランスがくずれて研究が停滞してしまったようです。その結果、連載を始めたばかりの「『嘉納治五郎』（1964年）を読む」が書けませんでした。なんとか工夫して時間をつくり、次号では連載記事をふくめ、研究を進めていきたいと思います。

京都市学校歴史博物館で12月14日から2025年3月30日まで、企画展「京都市の学校文化―元番組小学校編―」が開催されると聞きましたので、次頁にチラシをご紹介します。隠された「京都市の学校文化」の探索と発掘を試みる意欲的な展示のようです。2月22日には、学芸員の林潤平さんによる講演会（申し込み順）も開催されます。(冨岡)

京都市学校歴史博物館
Kyoto Municipal Museum of School History
探索!
京都市の学校文化
元番組小学校編
作法室
学校博物館
本館正面型モダン鉄筋校舎
講堂
カルフィッシュ
中間休み
京の小学校の
日常・行事・思い出
町別児童会
ぶらじる丸
小関越
町衆
学区民運動会
学区
竈金
祇園祭
みさきの家野外活動
『わたしたちの京都』
『わたしたちの伝統産業』
「京都流」教育実践
『子供記』
開館時間 9時ー17時(入館は16時30分まで)
休館日 水曜日(祝日の場合は翌平日)
入館料 大人400(320)円 小・中・高生150(120)円
※京都市内の小・中学生は土曜日・日曜日入館無料
※( )は20名以上の団体料金
2024 12.14(土)
2025 3.30(日)
年末年始 12.28(土)ー1.4(土) 休館

探索！京都市の学校文化
―元番組小学校編―

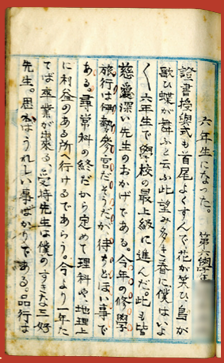
「学校文化」とは、私たちが学校で何気なく行ってきたことや、それとなしに従っていたルール、さらには修学旅行や運動会等の諸活動（行事）などのことを、総体的に指す言葉・考え方です。そしてその学校文化は、例えば「地域によって修学旅行の行き先が異なる」、さらには「自分の住む地域には特別な給食のメニューがあった」等の例からも、全国一律なものでは決してありえず、実は各校、さらには各地域において、多様性を多分に示すような形で、今日まで育まれてきたと考えられます。

それでは、この京都市には、一体いかなる学校文化が存在しているのでしょうか？本企画展は、元番組小学校を舞台としてこの謎に迫り、隠された「京都市の学校文化」の探索と発掘を試みる展覧会です。

1.

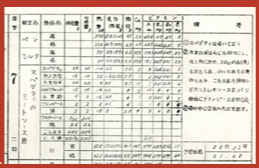
3.

5.


7.

2.

4.


6.

1. 上十学区域略図　明治33(1900)年頃(推定)　当館管理
2. おくどさん模型　昭和初期　元小川幼稚園蔵
3. 建築概要と設備の大要　昭和6(1931)年　元明倫小学校蔵
4. 私たちの京都　昭和28年度版(京都市社会科教育研究会編)　当館管理
5. 京都市明倫尋常小学校鉄筋コンクリート校舎竣工記念アルバム　昭和6(1931)年　元明倫小学校蔵
6. スパゲティのミートソース煮のレシピ　昭和39(1964)年　当館管理
7. 児童作文「六年生になった。」(『文集 ま3』所収)　大正5(1916)年　元柳池小学校蔵

関連イベント
※参加費無料
（別途入館料が必要）

講演会
「京都市の学校文化を探る！―展示品・歴史史料・関係者の回想を導きの糸として―」
日　時：令和7年2月22日（土）14時～15時30分　　会　場：京都市学校歴史博物館　3階講義室
講　師：林　潤平（当館学芸員）　　定　員：50名（要申込／先着順）

申込方法
①イベント名、②参加代表者氏名（ふりがな）、③代表者の電話番号、④参加希望人数を明記のうえ、
電話・FAX・Eメールのいずれかでお申込みください。
電話：075-344-1305　FAX：075-344-1327　Eメール：rekihaku-jigyou@edu.city.kyoto.jp

阪　急…京都河原町駅　徒歩約10分　10番出口「藤井大丸口」から南西へ
京　阪…祇園四条駅　徒歩約15分　3番出口から南西へ
地下鉄…烏丸線四条駅　徒歩約12分　5番出口から東へ
市バス…四条河原町　徒歩約10分　南西へ
市バス…河原町松原　徒歩約　5分　北西へ

駐車場はありませんので、
公共交通機関を御利用ください。

※正門（御幸町通側）からお入りください

京都市学校歴史博物館
Kyoto Municipal Museum of School History

〒600－8044　京都市下京区御幸町通仏光寺下る橋町437 TEL.075-344-1305
※水曜休館　●この印刷物が不要になれば、「雑がみ」として古紙回収へ　学校歴史博物館